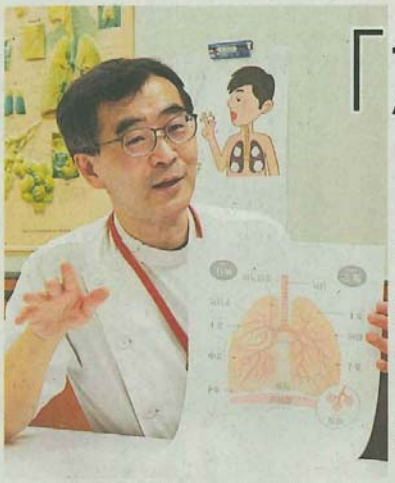
令和4年7月26日（火曜日）　静岡新聞夕刊

「たばこ肺」万病のもと

せきや息切れ 40歳以上は注意

藤枝市立総合病院
小清水直樹副院長



喫煙による肺の炎症「たばこ肺」について説明する小清水直樹副院長＝藤枝市立総合病院

喫煙などによって肺に炎症が起きる慢性閉塞（へいそく）性肺疾患（ＣＯＰＤ）は、進行すると運動量や体重が減りやすいことからさまざまな疾患にかかりやすくなる。藤枝市立総合病院の小清水直樹副院長（呼吸器内科）は喫煙から引き起こされる病状を「たばこ肺」と呼び、肺の生活習慣病として注意を促す。ＣＯＰＤは新型コロナウイルスに感染すると重症化することも指摘されている。

小清水副院長によると、「たばこ肺」は喫煙による有害成分を排除しようとした気管支と肺に炎症が起き、肺をつくる肺胞壁が壊れてなくなる状態。肺気腫や慢性気管支炎とも呼ばれる。息切れしやすくなって運動量は減り、日常生活を支えていた身体機能まで衰えるなど悪循環に陥りやすい。

せき、たん、息切れなどの症状が発作的に表れるぜんそくと似ているが、ＣＯＰＤは常に症状が出るのが特徴。40歳以上の人に多く、息切れを年齢のせいだと感じてしまう人も多いという。小清水副院長は「ＣＯＰＤの名前だと分かりにくいが、たばこ肺は万病のもとと心得てほしい。たばこ、40歳以上、せき、たん、息切れをキーワードに、周囲が指摘してあげることも大事」と呼び掛ける。

ＣＯＰＤの患者数は推定約５００万人。厚労省の調査では、２０２０年の死者数は1万6千人。治療方法が進歩しているぜんそくに比べて10倍以上も多い。国は、がん、循環器疾患、糖尿病に並ぶ疾患として認知度目標を80％に設定しているが、実際は30％程度にとどまっている。

喫煙量と発症の関連をみると、1日20本を20年ほど吸った人で発症するのは3割ほどだが、受動喫煙で発症する人もいるという。喫煙は煙の通り道となる舌、のど、気管支、肺のほか食道、胃などのがんが発生する確率も高くなるという。

たばこ肺は肺炎にもなりやすく、心筋梗塞などの虚血性心疾患、骨粗しょう症、糖尿病なども合併するという。小清水副院長は「いったん壊れて消えた肺は元には戻らないが、治療方法の研究は進んでいる。症状を改善したり進行を遅らせることはできるので、早期の症状を見逃さないでほしい」と話す。

（文化生活部・宮城徹）

＜メモ＞国立がん研究センターの統計によると、成人の喫煙率は男性27％、女性７％。いずれも減少傾向にある。2018年にＣＯＰＤで亡くなった落語家桂歌丸さんが生前に啓発ポスターに登場した際、疾患の認知度が上昇した。